

銀のペンセル

小川未明

青空文庫

三味線しやみせんをひいて、旅たびの女おんなが、毎まい日にち、温泉場おんせんばの町まちを歩あるいて
 いました。諸国しよこくの唄うたをうたつてみんなをおもしろがらせていた
 が、いつしか、その姿すがたが見みえなくなりました。そのはずです。も
 う、山やまは、朝晩あさばんさむ寒さむくなつて、都みやこが恋こいしくなつたからです。
 勇ゆうちやんも、もう、東とうきよう京きやうのお家うちへ帰かえる日ひが近ちかづいたのでし
 た。ここへきて、かれこれ三十日にちもいる間あいだに、近傍きんぼうの村むらの子供こども
 たちと友ともだちになつて、いつしよに、草花くさばなの咲さいた、大おおきな石いし
 のころがつている野原のほらをかけまわつて、きりぎりすをさがせば、
 また、水みずのきれいな谷川たにがわにいつて、岩魚いわなを釣つつたりしたのであ
 ります。

「君、もう、じきに東京へ帰るのか。」と、一人の少年が勇ちゃんにききました。

その子は顔がまるくて、色の黒い快活の少年でした。勇ちゃんは、この少年が好きで、いつまでも友達ちでいたかったのです。

「君のお家が東京だと、いいんだがな。」と、勇ちゃんは、いいました。

「君のお家こそ、こつちへ引つ越してくれば、いいのだ。」と、少年は答えました。

空の色が、青々として、白い雲が高く野原の上を飛んでゆきます。

あとの子供らは、いつか、どこかへ行ってしまったのに、その少年ばかりは、名残惜しそうに勇ちゃんのそばから、いつまでもはなれずにいました。

「いいところへ、つれて行ってやろうか。」と、少年は先に立つて、草を分けて、山の方へ歩きました。

「どこへゆくんだい？」

勇ちゃんは、顔をあげて、いくたびもあちらを見ました。少年は、だまつて歩いていましたが、やがて目の前に、林が望まれました。葉風が、きらきらとして、木の枝は、風にゆらめいていました。もう口を開けているくりの実がいくつも、枝のさきについているのでした。

「僕、見つけておいた、いいものを取ってきてあげるから、ここに待っていたまえ。」と、少年は雑木林を分けてはいりました。そして、あちらの、こんもりとした、やぶのところへ行って、しきりと、つるをたぐり寄せていました。勇ちゃんは、後ろについてはいる勇気がなく、林の端に、立って待っていると、少年は紫色のあけびの実をいくつも、もいできてくれたのであります。

「この森には、りすがいるから、みんな食べてしまっただ……。」と、少年は、いいました。

勇ちゃんは、はじめて、りすは、こんなところにすんでいるのかと知りました。

「東 京へ持つて帰つて、お土産にしよう。」

勇ちゃんゆうちゃんは、兄さんにいさんや、姉さんねえさんや、また、近所きんじよの叔母さんおばさんに、これを見せたら、どんなに喜ばれるだろうと思ひました。

「東 京へ持つて帰るなら、まだ、いいものがあるぜ……。高山植物こうざんしよくぶつが、いいだろう……。」

「高山植物があるの？」

勇ちゃんゆうちゃんは、少年しょうねんについて、こんどは山やまの方ほうへ上のぼつてゆきました。山やまと山やまの間あいだになつてゐる谷たに合あいにさしかかると、日ひがかげつて、どこからか、霧きりが降りてきました。岩角いわかどに白しろい花はなが咲さいているのを、少年しょうねんは、見みつけて、

「これは、うめばちそうだ。」といつて、丁寧ていねいに根ねから掘ほつて

くれました。

また、湿しめっぽい、日ひのわずかにもれる、木きの下したをはって、小ちいさいさんごのような赤あかい実みのなっているのを指さしながら、

「これは、こけももだ。こうして持もつていったら、根ねがつくかも
しれない。」と、少しょう年ねんはしんせつに、掘ほつてくれました。

温泉場おんせんばの町まちまで、二ふた人たりは、いっしよにきました。別わかれる時じ分ぶん
に、

「君きみ、また明日あすのいまごろ、あの大おおきなしらかばの木きの下したであわ
ない？」と、勇ゆうちちゃんはいいました。

無む邪じゃ気きな、黒くろい目めをした少しょう年ねんはうなずいて去さりました。

「なにか、僕ぼくの持もっているものをやりたいな。」と、勇ゆうちちゃんは

少年しょうねんと別わかれてから、考かんがえていました。

「明日あすあつたとき、僕ぼくの大事だいじにしている銀ぎんのペンセルをやるう：
 …。」と、心こころの中なかで、きめました。いつしか、約やく束そくした翌よく日じつ
 とは、なつたのであります。

しらかばの下したへ、勇ゆうちやんはくると、すでに少しょう年ねんは待まつて
 いました。おたがいに、にこにことして、また、珍めづしい草くさをさが
 したり、石いしを谷たにに向むかつて投なげたりしましたが、勇ゆうちやんは、忘わす
 れないうちに、持もつてきた、銀ぎんのペンセルを出だして、

「これを君きみにあげよう……。。」といつて、少しょう年ねんに渡わたそうとし
 たのです。

少しょう年ねんは、手てを出だしたが、じつと見みて、それをもらおうとは

しませんでした。

「僕、こんないいものいらぬい。」と、顔を赤くしながら辞退しました。

「いいから、君にあげよう。」と、勇ちゃんは、無理にも取らせようとしました。

「僕、鉛筆があるから、いらぬい。」と、少年はなんといいつても取らなかつたが、ついに、駆け出していつてしまったのです。

勇ちゃんは、あとで、さびしい気がしました。それから、温泉場を立つ日まで、ふたたび少年を見るこゝろがでなかつたのでした。東京へ帰る汽車の中でも、勇ちゃんは、少年

年のことを思い出していました。

「なんで僕のやろうとといった、ペンセルを取ってくれなかったの
 だろうな……。」

こう思ったが、一方に、ペンセルなんか欲しがらない、少年が、なんとなくなつかしく感じられたのです。

高山植物は、都会へ持つてくるとしおれてしまいました。

「どうかして根のつくように。」と、勇ちゃんは高い物干し台の上
 上に、こけももとうめばちそうの鉢を持ってきておいたのです。

青い青い夜の空は、遠く、北の方に垂れかかっていました。その
 かなたには、これらの植物のふるさどがありました。星の光
 が高原の空にかがやいたように、夜ふけの空にきらめき、さす

がに、都会にも、秋がきたのを思わせて、風がひやひやとしました。

「ここに置いたら、山にいろよな気がして、根がつくかもしれぬ。」と、勇ちゃんは、少年の取ってくれた草花を大事にかばいました。そしてあくる日、夜の明けのを待って、物干し台に上がってみますと、なんとしても、だますことはできなく、うめばちそうの白い花は頭を垂れ、こけももの細かい美しい葉は幾分か黄ばんでいるのです。

あの清浄な、高い山でなければ、これらの草花は育たないことを知りました。勇ちゃんは、それから毎晩のように物干し台に上がって、青い夜の空をながめながら、高い山や、少

年んのここを思おもい出だしていまいました。白しろ々じろととして、銀ぎんのペンセル
のようように、天あまの川がわが、しんとした、夜よるの空そらを流ながれて、その端はしを地ち
平へい線せんに没ぼつしていまいました。

「僕ぼくは、ここんないないものものははいらいらない。」とといいつた、少しょう年ねんの言こ
葉とばが耳みみにひびひびいて、ここけもももの赤あかい実みのようように、うめうめばちばちそそうの
白しろい花はなのようように、勇ゆうちちゃんんには、未み知ちの山やま国ぐにの生せい活かつがななつつか
しましまれたのであありまます。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 ㄨ」講談社

1977（昭和52）年5月10日第1刷発行

1982（昭和57）年9月10日第6刷発行

底本の親本：「未明童話集5」丸善

1931（昭和6）年7月10日発行

初出：「児童時代 創刊号」

1930（昭和5）年12月

※表題は底本では、「銀《ぎん》のペンセル」となっています。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：きゆうり

2020年5月27日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<https://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

銀のペンセル

小川未明

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>